

新型コロナウイルスに 打ち勝つことを信じよう！

【NHKの「晴天を衝け」が佳境を迎える】

NHKの大河ドラマ「晴天を衝け」の撮影は、群馬県の安中市松井田町で行われていたと聞きました。幕末時代の埼玉県深谷市の情景を描くのに最適だったそうです。撮影は、今年5月で終わりセットは解体されましたが、情景はそのまま残っているそうです。

さて、2024年に新壱万円札の肖像になるドラマの主人公の渋沢栄一（1840～1931年）とは、どんな人物であったのか？



【渋沢栄一記念館（埼玉県深谷市）】

「近代日本経済の父」と呼ばれる渋沢栄一は、天保11（1840）年、武蔵国榛沢郡^{ちあらいじま}血洗島村（現在の埼玉県深谷市）に生まれました。生家は農家で、麦作のほか養蚕や藍玉の製造販売を手掛けていました。幼い頃から家業に励んだほか、従兄の^{おだかあつただ}尾高惇忠に『論語』をはじめとする漢籍を学びました。

元治元（1864）年、栄一は^{ひとつばし}一橋家に仕えることになり、当主の^{よしのぶ}慶喜（徳川慶喜）が将軍となったため幕臣になります。慶応3（1867）年、パリ万国博覧会の幕府使節団となり、徳川^{あきたけ}昭武に従って渡欧しました。ヨーロッパの社会経済制度を見聞し、日本の近代化の必要性を痛感しました。維新後帰国し、明治新政府に出仕した後、実業家として幅広く活躍します。日本初となる銀行、鉄道やガスといった様々な会社を設立・育成し、その数は生涯で約500社とされています。また、事業から引退後も学校や病院といった約600件の社会公共事業等に尽力しました。明治42（1909）年、69歳になった栄一は実業の第一線から退き、大正5（1916）年には完全に引退します。以後、民間外交にひとときわ注力し、日本国際児童親善会を設立、アメリカとの「友情の人形」の交換を主導しました。これらの国際平和への貢献が評価され、2度にわたってノーベル平和賞の候補になりました。

昭和6（1931）年11月11日、東京の飛鳥山の自邸で91歳の生涯を閉じました。栄一の会葬者は3万人を越え、その死を惜しんだそうです。（大正時代の童謡「赤い靴」、「青い目の人形」は、日米親善につくした功績として光り輝いています。）

【個人の葬儀としてはすごい規模であった！】

栄一の葬式は個人の葬儀としては未曾有の盛儀であったと言われております。「霊柩車の後に喪主の車を始めとし、何十台もの自動車がつづいて葬列を作った。飛鳥山から青山斎場ま

で長い道筋の両側に、たくさんの学校や団体の方がたがびっしりと並んで見送った。」と言われているそうです。斎場では、急に場内が静かになる瞬間があり、何かと思ったら天皇からの勅使^{ちよくし}が到着された瞬間であったと記されているそうです。

【葬儀に多くの方が列をなしたと言えば・・・】

芸州広島最後のお殿様である浅野長勲^{あきのながこと} (1842～1937年)の葬儀も多くの方が列をなしたそうです。長勲は「昭和まで生きた最後の大名」と呼ばれ、幕末、明治、大正、昭和までを凜と生き抜かれました。

長勲は、数奇な人生を通じて、激動の近現代史を振り返っている自叙伝を残しました。逸話の一つに「大名のくらしは不便なもので、食事の時にご飯にネズミの糞が入っていたのを見つけた時、黙って食べなければならなかった。なぜならば、ご飯に糞があるぞといえ、ま

かない方のだれかが腹を切ることにもなりかねないからだ。」といった内容があるそうです。

ある時、徳川慶喜は「老中が強すぎて、俺の言うことなど聞いてくれない」と、長勲の前でポロポロ涙を流したといえます。慶喜の涙を見た大名が、この時代に何人いたでしょうか。また、攘夷論者^{じょうい}として知られた孝明天皇が、実は「攘夷は方便である」と長勲に打ち明けたそうです。こう



いったエピソードから、長勲の人柄がうかがえますね。

さらに、長勲は大政奉還で建白書の提出、新聞「日本」の発行、小御所会議での活躍、日本初の洋紙製造会社の創業、イタリア大使、昭和天皇の養育係、実業・言論・政治の世界で一目置かれる存在と言われていたそうです。

昭和12年（1937年）2月1日、長勲は94歳の長寿をもって死去しました。広島の人たちは、「芸州広島最後の良いお殿さまだった」と涙したと言います。広島れんべいじょうの練兵場には、葬儀に3万人が参列したと当時の中国新聞に残されているそうです。

洪沢栄一や浅野長勲は、私欲を捨てて近代国家づくりに邁進し、なおかつ庶民に親しまれています。それが双方の会葬者が「3万人」という数に表れているのでしょう。

【国葬だからといって会葬者が多いわけではない】

盛儀だった二人を紹介しましたが、実績がある方でもそうでないこともあります。総理大臣等多大な功績を残した方がいましたが、国葬として1万人の参列者を予定してテントを用意されたにもかかわらず、参列者はわずかに千人だったそうです。

【コロナ禍中の葬儀は、ひっそりと！】

最近の葬儀では、新型コロナウイルス感染症の影響により会葬者を留ませない葬儀となりました。どこの会場も社会的ディスタンスを取り、ひっそり感があります。町長や議員等も、滞留する事はなく、以前に行っていた指名焼香等もなくなりました。新しい生活様式の取り入れによって、親戚関係者だけの葬儀がこれから主流になっていくのではないかと思います。

【新型コロナウイルス感染症に打ち勝つために】

新型コロナウイルス感染症は、幾度となく波を作り型を変えて襲って来ます。それに対応するためにはワクチン接種がとても重要です。明和町は、人口1万1千に対し12歳以上が約1万人おります。現在、ワクチン接種回数は1万1千回を超えました。(令和3年8月8日現在、2回目接種含む)これから9月中旬まで週4回の接種を続けると、12歳以上のワクチン接種券発行者の約70～80%が2回接種を達成できる計算となります。

最近では、感染する方が20代、30代、40代と、ワクチン未接種の方々が多いうように感じます。このことから、ワクチンは効果があるものと推測されますので、是非ワクチン接種をしていただきたいと思っております。

また、これからデルタ株とラムダ株が主流となった場合には、ブースト(強化)と言って3回目のワクチン接種があるかもしれません。また、塩野義製薬から新型コロナウイルス感染症の軽症、中等症に対する飲み薬も発売される予定です。まさにインフルエンザ同様の認識になっていくものと思われ、またそうなってほしいと思っております。

人類は今までもこの地球上で、色々な病原体との戦いを繰り返してきました。そして、それに打ち勝ってきたのです。今度の新型コロナウイルスにも必ず打ち勝つことが出来ると信じております。

また、2年続きで夏祭りや体育祭、産業祭、文化祭等が中止とされ、さみしい限りですが町民の皆様の健康と安全を第一に考慮した結果であります。何卒ご容赦ください。

そしていつの日か、新型コロナウイルス感染症と共に生活できる日常を取り戻し、町の行事が滞りなく行える日が来ることを確信し、葬儀も多くの方が参列できる日が戻ることを切に願います。

(一部 Wikipedia より参考・引用しました)

令和3年8月19日

明和町長 富塚もとすけ